放送大学科目「現代哲学への挑戦」平成２３年後期、自習型問題・回答の下書き　(2011-12-20)

ヘーゲルが、全世界のすべての説明図を作成してから、キェルケゴールとマルクスによる反発があり、現代哲学が生まれました。マルクスの流れは、ソヴィエトという人類の実験が失敗して、現在では哲学自体が消滅したように見えます。キェルケゴールの流れは、サルトル以降の実存主義に引き継がれ、世界よりも自己の生をこそ、かけがえないとしました。その後、現象学や構造主義や、もろもろの哲学や反哲学や、やって来ては消えてゆきました。

リオタールが「大きな物語」は終わったと宣言してからも、すでにひと昔が過ぎました。その意味では、ポストモダンもすでに終わり、次の時代に移ったと云えるかもしれません。ギリシャ以来の西洋哲学は、今となっては、何だったのだろうかと、首を傾げたくなります。現代の状況を見ると、機械的な人間の世界はますます進み、ネットというリゾームに絡み取られた人間世界があります。従来の真実を探究する哲学という人間の営みも、情報を検索するという機械的な動作に変化しました。全てが相対化している世界で、人間が人間として自覚して生きることの困難さを感じます。現代哲学者にも、相対的な言説しか感じられず、深くコミットする気持ちが起こることはありません。リオタールの「ポストモダン」が、時代に囚われることに対する単なる反省のスタイルであるとすれば、この言説が一番まっとうにも感じられます。

現代に救いを求めるとすれば、機械となった人間の世界は、どことなく原始の野蛮時代の人類と同じようなレベルの平等な世界となりつつあるように見えることです。人間が歴史的に積み上げてきたすべての制度が、これから無意味になる時代が、必ずや到来すると思われます。人類は、野生の時代に帰ることにより、機械の中の人間から、自然の中の人間に戻ることが出来るのではないだろうか。もし人間に哲学が必要であるならば、「自然に帰れ」という、ルソーの言葉が今に復活すべきです。ヨーロッパ哲学と科学の流れは、ルソーの気が付き向かうべき、と考えた方向とは反対の方向へ来てしまったのです。野生に帰えれば、地球のある地点だけに偏在しない、日本も中国も、西洋から未開と云われたアフリカや、アメリカのネイティブも参加した、すべての地球で通用する哲学を構築できると思われます。

レヴィーストロースの「野生の思考」が一番好ましい。アルタミラの洞窟で、野生人は自然を写しただけです。美も、カントの判断力から離れて、自然に内在する美をミメーシスすることが芸術です。現代の科学技術によれば、ベンヤミンの「アウラ」も、デジタルコピーこそに宿るものです。物質の作品の方が仮像にしか過ぎません。真実も、ものによる保証など必要ありません。情報に宿る真実は、鮮度だけがすべてなのです。

哲学は、陽炎のごとく揺らめき、はたまた、生鮮食品のように賞味期限があり、もしかしたら再利用が可能なのかも知れないのです。